

和辻哲郎とマックス・シェーラーの倫理学の比較研究

横山 陸(日本学術振興会)

本発表の目的は、和辻哲郎の「間柄」の倫理学と、マックス・シェーラーの「人格」の倫理学とを、規範性という観点から比較することにある。よく指摘されるように、和辻の倫理学の体系形成に大きな影響を与えたのは、ハイデガーの現象学である。ハイデガーが『存在と時間』(1927年)において展開する基礎存在論は、もっぱら環境世界における道具としての事物との交渉という局面から、「世界内存在」としての人間存在を捉えようとする。それに対して、和辻は環境世界よりも、他者との共同世界を根底に位置づける。そして、ハイデガーが時間性へと還元してしまう「世界内存在」としての人間存在を—とりわけその空間性を—「間柄」として確保する。和辻のこうした考察の方向性を可能としたのは、苅部が指摘するように(苅部 2010:182)、ディルタイやマルクスの思想である。さらに、ヘーゲルからの影響も見受けられる。和辻は『倫理学』(1937-49年)において、「間柄」としての人間存在の根本構造を、全体と個のあいだの「弁証法の構造」として解釈し(第一、二章)、その実質を「人倫的組織」の諸形態として(第三章)、さらに「歴史的風土性」の諸形態として展開している(第四章)。そのさい、和辻が「人倫的組織」の諸形態を展開する仕方は、湯浅が指摘するように(湯浅 1981:265)、ヘーゲルの『法哲学』における「人倫の体系」の思想が色濃く反映されている。このように、和辻の倫理学に思想的影響を及ぼした哲学者としては、ハイデガー、ディルタイ、マルクス、ヘーゲルらの名がよく挙げられる。

ところが、和辻が『倫理学』において、人間の「間柄」存在の根本構造を、全体と個のあいだの「弁証法の構造」として解釈するさいに、彼が繰り返し言及するのは、マルクスでもヘーゲルでもハイデガーでもなく、シェーラーなのである。『倫理学』全体でも、シェーラーの名が挙げられる回数は、カントに次いで多い。シェーラーが『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』(1913-16年)および『共感における本質と諸形式』(1913/23年)において展開した人格の倫理学は、人格を「個別人格(Einzelperson)」としてだけでなく、「全体人格(Gesamtperson)」として捉えることで、人格の共同態の諸相を明らかにしようとしている。和辻は『倫理学』において、こうしたシェーラーの人格論を繰り返し批判することを通じて、みずからの「間柄」概念を展開している。さらに、和辻の思想遍歴を見ると、彼は、個人の心的内面に重点を置く人格主義から、他者との関係を生きる「間柄」の倫理学へと転回しているが、苅部(2010:168)や宮川(2015:104ff.)が指摘するように、和辻が人格主義に批判的な目を向けるようになったさいにも、シェーラーの人格論の影響が見受けられる。和辻の人格主義は、テオドール・リップスの心理主義に倣ったものだったが、シェーラーはリップスが考えるような個人の心的自我とは別の次元に、人格存在を設定しており、和辻もこの点に注目している。

こうした和辻とシェーラーとの外形的な関係を考えるだけでも、両者の倫理学を比較することは、有意義な試みだと言えるだろう。「間柄」の構造を、全体と個の「弁証法の構造」として解釈するさい、和辻は、「個別人格」と「全体人格」との連関からなるシェーラーの倫理学を、どのように理解し評価していたのだろうか。少なくとも、この点は明らかにされるべきだろう。ところが、これま

で和辻とシェーラーを詳しく比較した研究は、あまりなかったように思われる。数少ない研究のなかで、近年の注目すべき研究は、宮村によるものである(宮村 2016)。宮村は、個人の「孤独」という現象が、どのように位置づけられているかに注目して、和辻の「間柄」の倫理学とシェーラーの「人格」の倫理学との比較を試みている。宮村の研究からは、和辻とシェーラーの倫理学はどちらも全体と個の関係を扱っているものの、和辻の方がより共同体主義的であり、シェーラーの倫理学はより個人主義的である、と性格づけることが可能だろう。

以上の問題関心と既存の研究に基づいて、本発表は、和辻の「間柄」の倫理学とシェーラーの「人格」の倫理学とを、さらに規範性という観点から比較することを試みたい。一方で和辻において、全体と個とのあいだの「弁証法の構造」をもつ「間柄」は、それ自身、人間同士のあいだの「型」として、規範性を意味するはずである。他方でシェーラーは、「個別人格」と「全体人格」との連関から「連帯」の原理を構想しているが、こうした「連帯」も規範性として理解できるだろう。そこで本発表は、まずシェーラーの『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』第六章「形式主義と人格」における、人格の共同態の分析を取り上げて、「個別人格」と「全体人格」との連関から、彼の「連帯」概念の性格を明らかにしていく。つぎに和辻の『倫理学』第一章「人間存在の根本構造」におけるシェーラー批判を解釈しながら、和辻とシェーラーにおける、全体と個の連関の相違に注目する。そしてそれを通じて、和辻の「間柄」とシェーラーの「連帯」のあいだの規範的性格の差異を明らかにしていく。現代の議論から見れば、和辻の「間柄」もシェーラーの「連帯」も、どちらも共同体主義的なアプローチに他ならないが、以上の比較考察を通じて、本発表は最終的に、共同体主義的なアプローチから、どの程度の倫理的規範性が導出できるのかを明らかにしたい。

参考文献

- 苅部直 2010, 『光の領国 和辻哲郎』岩波書店(岩波現代文庫)
- 宮川敬之 2015, 『和辻哲郎—人格から間柄へ』講談社(講談社学術文庫)
- 宮村悠介 2016, 「個体であることの孤独について—人格の倫理学のために」, 『実存思想論集』第 31 号, 実存思想協会, 135-151 頁
- 湯浅泰雄 1981, 『和辻哲郎—近代日本哲学の運命』ミネルヴァ書房